

# ニュース レター News Letter No.19

## CONTENTS

松田所長 巻頭言	1
2008年度各研究プロジェクト・グループ・委員会活動計画	2~3
2007年度の公開シンポジウム「外から見た日本」	4~5
～タイと日本の共通点と相違点～(2)	
2008年度キリスト教と文化研究所 所員・研究員・客員研究員一覧	6~7
2008年度に新しく参加した客員研究員2名の自己紹介	8
客員研究員の広場 葛西賢太 岡西愛濃	

CHRISTIANITY AND CULTURE RESEARCH INSTITUTE KANTO GAKUIN UNIVERSITY

## 巻頭言

所長 松田和憲



まもなく暑い夏が再びやって参りますが、皆様方にはいかがお過ごしでしょうか。ここに、本大学「キリスト教と文化研究所」刊行の2008年度「ニュースレター No.19」を皆様のお手許にお送りします。この小冊子から当研究所の最近の活動状況を覚えてくださり、今後も変わらぬご理解とご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

当研究所の活動も新年度になってすでに3ヶ月ほどが経ち、それぞれが活発に活動を展開しておりますが、それについて網羅する余白はございません。詳細については本号2ページ以下に記載しておりますのでどうぞお読みください。

この巻頭言におきましては、当研究所の出版に関する主な計画を紹介しておきたいと存じます。1つ目の研究所の出版計画として「バプテスト研究プロジェクト」から、叢書第2号『バプテストの歴史的貢献2』の来春発刊に向けて、論文執筆に取りかかっているとの報告を受けています。第1号と共にご愛読のほどよろしくお祈りします。2つの出版計画も「バプテスト研究プロジェクト」チームから出てきております。このチームは「バプテスト教科書作成」計画を立案し、2010年春の発刊を目指して、具体的な準備に着手しております。刊行の目的は、バプテストの歴史と神学、世界史における歴史的貢献など、今まで必ずしも正当な歴史評価を得て来なかった事柄、分野に光をあてて、広く多くの方々に読まれることを通してバプテストについての再認識を得たいとしている点にあり、これを出来ますならば、神学校、大学神学部、さらには、大学の授業、教会での研修会等でテキストとして用いられることを願っています。既に数回編集委員会を開き、執筆者も特定され、いよいよ執筆段階に入ろうとしています。執筆者全員が日本のバプテスト研究の専門家たちで、本学所員・村椿真理氏、客員研究員・金丸英子氏、枝光泉氏、松岡正樹氏に加えて、斎藤剛毅氏が執筆を担当してくださるほか、現キリスト教史学会会長・出村彰氏が監修者を担ってくださることになっています。これが発刊された暁には、日本におけるバプテスト研究の新たな1ページを飾るものになるものと期待しております。研究所と致しましては、この出版計画を全面的に支援し、バプテスト研究の草分け的な役割を果たす研究機関として多少なりとも専門分野を有する研究所に成長したいものと念じています。以上、出版に関する予定についてのみ紹介させて頂きましたが、他の研究グループ、プロジェクトチームの諸活動、計画の仔細につきましては、次号において報告させて頂きたいと存じます。

最後にもう一点、ご案内を致します。多くの皆さんは、すでにご承知置きのことと思いますが、今年の9月16日(火)~17日(水)、日本基督教学会・第56回学術大会が「近代市民社会とキリスト教」を主題として、関東学院大学・金沢八景キャンパスにおいて開催され、「キリスト教と文化研究所」は事務局を担当することになりました。両日の午前中は研究発表、第一日目の午後には明治学院大学学長・大西晴樹先生による主題講演、二日目の午後にはシンポジウムを予定しております。もし時間が許すならば、どうぞお運びくださるようご案内致します。なお、この学術大会の詳細につきましては、事務局でホームページを立ち上げましたので、それをご覧ください。

それでは皆様方の上に、主の守りと導きを祈りつつペンをおかせて頂きます。

2008年

日本基督教学会・第56回学術大会事務局 ホームページ

<http://univ.kanto-gakuin.ac.jp/>

## 「バプテスト」研究プロジェクト

所員 プロジェクトリーダー 村椿 真理  
バプテスト研究プロジェクトは今年度も二つの研究グループが平行して活動を継続する。第一は、バプテストの歴史的貢献2の研究会であり、第二は、バプテスト史(教科書)執筆、刊行プロジェクトである。前者は現在7人のメンバーが論文執筆にエントリーしており、内4人は既に中間発表を終えている。目下の時点で予定されている論文は以下の通りである、タイトル、また内容の若干の変更はある。

1. アンドリュー・フラーの神学と英国バプテスト伝道会設立における貢献 村椿 真理
  2. バプテストの海外伝道の起源と発展 佐々木敏郎
  3. ロジャー・ウィリアムズのイコノグラフィー 佐藤 重光
  4. N・ブラウンのアメリカ言語学協会とコズミックアルファベットの作成まで 川島第二郎
  5. 駿台女学校、アンナ・H・ギダーの研究 影山 礼子
  6. 日本バプテスト派の婦人達の宣教活動に関する歴史研究(東部組合聯合婦人会の成立) 原 真由美
  7. 東京におけるバプテスト教会の歴史研究1、四谷バプテスト教会を例として 古谷 圭一
- 本プロジェクトのメンバーは以下の通りである。  
代表・所員：村椿真理  
所員：影山礼子、木村浩二、安田八十五  
研究員：佐藤光重  
客員研究員：松岡正樹、大島良雄、川島第二郎、佐々木敏郎、原真由美、伊藤 哲、古谷圭一

本研究プロジェクトはこれらの研究成果を論文集として出版することを目指しているが、現在なお出版助成獲得のめどはついていない。研究所叢書第1号に続くものとして、発信できるよう模索している。

後者の「バプテスト史」刊行プロジェクトは、既に一年間の準備段階を経て、執筆計画がまとめあげられたものである。既に、現「キリスト教史学会」理事長の出村 彰氏を監修者にお迎えし、執筆規定も定められ8月には京都会場で監修者も同席しての第二回目の執筆者会議が開催される運びである。予定では、バプテスト派が創設400年を迎える時期にこの書の刊行を計画している。この計画は日本バプテスト連盟、日本バプテスト同盟、関東学院大学などからバプテストの研究者を集めて行なわれる企画であり、本研究所在我が国におけるバプテスト研究の一拠点となっていく、まことに象徴的な事業といえる。

刊行される書は、学術的なバプテスト史として我が国で初めて試みられるものであり、参加者は使命感と積極的な意欲をもって携わっている。構成員は、村椿真理の他、西南学院大学教授：金丸英子、日本バプテスト神学校：松岡正樹、日本バプテスト連盟牧師：枝光 泉、福岡女学院大学名誉教授：斉藤剛毅の5名である。

## 「坂田祐」研究プロジェクト

所員 プロジェクトリーダー 帆苺 猛  
2008年度は昨年度より継続して下記のような活動を予定している。

1. 研究会開催  
第1回研究会を6月12日(木)午後4時半から開催。これ以後、休みの期間を除いて、毎月一回程度開催したい。
2. 坂田日記研究  
従来と同様に、坂田創氏に解説していただいた日記を通して、学院史、坂田の活動についての研究をすすめる。
3. 坂田日記のデータのデジタル化  
解説した日記をデジタル・データとして記録・保存をする。
4. 坂田東京帝大卒業論文『エレミヤ書』の出版の検討  
昨年デジタル化して出版の計画を立てたが、費用の問題が解決せず、出版できなかった。今年度も継続して出版の可能性を探りたい。
5. 資料の調査・収集  
学院史資料室と連携して資料の調査・収集を進めていきたい。坂田の手書きの資料については、できるだけ一括して保存する体制を整えたいと思っている。

新たな研究課題としては、今年度は「坂田と白雨会」についての研究をすすめたい。研究会を進める中で、できれば、講師を招いて、公開セミナーを開催したいと考えている。

このほか、「坂田の足跡を訪ねる」企画も練りたい、と考えている。今年度が無理なら、次年度に実行したいと考えている。前回は足尾に行ったので、次回は会津(坂田の両親の出身地)か大湯(坂田の出生の地)にいてみたいと考えている。

## 「国際理解とボランティア」研究プロジェクト

所員 プロジェクトリーダー 森島 牧人  
①セミナーと公開講座の開催  
ルワンダに在住し、平和と和解のプロジェクトを進める佐々木和之客員研究員を講師とし、「ルワンダ

大虐殺から14年 -修復的正義の実現を目指して-」というテーマで7月1日に文学部キャンパスで公開講座を開催。佐々木氏は、この課題に深い関心を寄せられ、国際飢餓対策機構 (JIFH) を退職後、英国ブラッドフォード大学で平和学を学び、2005年秋より、現地のキリスト教 NGO の REACH の一員として働き始められている。

またタイ社会で活動している NGO、NPO 及び教育関係者を講師として設定し、現場での活動で得たノウハウを基にセミナーを開催し、研究者としての考察や理論を参加者と共に考える。

#### ②研究員による現地調査およびアンケートと聞き込み調査

2007年度に引き続き、タイ山岳少数民族アカ族の集落に滞在し、教育環境と生活環境に関する調査聞き込み活動を行う。その後、調査結果を基に両環境における自立型支援活動の実践を本学学部生と共に、建学の精神の実践の場を作る。

第1回現地調査活動として2008年5月に勘田客員研究員が現地調査を行う。その内容は教育環境調査として「キリスト教による児童識字教育とその影響」と「キリスト教による青年教育にみるシェルター(教会堂)の役目」である。また生活環境調査としては「上下水道の整備と環境汚染の関係」について主に生活排水の実態について現地調査を行う。

2008年8月および12月にも研究員による現地調査を引き続き行い、2009年2月には本学学生ボランティアグループΣソサエティの学生と共に研究員が現地に赴き、調査結果を基にした支援活動を行う予定である。具体的には集落におけるシェルター(教会堂)の建設や生活環境設備の整備、山岳民族子供寮での識字プログラムの開催、HIV 被害者孤児院での実習などである。

#### ③集計結果の翻訳

現地聞き込み調査や採取資料等を整理し、現地語であるアカ語からタイ語、英語の翻訳作業を経て最終的に日本語資料を完成する。この資料は研究活動の第一次資料として編集し、前年度より始めた編集作業と連動して、国際理解とボランティアプロジェクトアーカイブとして画像と共に当研究所 WEB サイトにて公開する。

#### ④国際理解とボランティアプロジェクトの今年度構成員は下記の通りである。

森島牧人(所員・文学部教授)、小林照夫(研究員・文学部特約教授)、Davidson Dwight Preston(研究員・文学部特約教員)、勘田義治(客員研究員・文学部非常勤講師)、島田正敏(客員研究員・関東学院六浦小校長)、吉川成美(客員研究員・株式会社永田農業研究所)、大西 純(客員研究員・弘前大学国際交流セ

ンター教授)、森島 豊(客員研究員・長崎平和教会牧師)、佐々木和之(客員研究員・ルワンダ NGO リーチ現地職員)、菊地昌弥(客員研究員・東京農業大学国際食料情報学部食料環境経済学科助教)、山本直美(客員研究員・専修大学非常勤講師)、加藤壽宏(客員研究員・中央学院大学非常勤講師)

### 「依存症とキリスト教」研究プロジェクト

所員 プロジェクトリーダー 安田 八十五

本研究プロジェクトの主たる目的は、『依存症』及び『依存症社会』の構造と特質をキリスト教の観点から分析し、解決の為の方法と手段を探ることとする。ことに、依存症からの回復の為に安田・三井・田代等が実践しているキリスト教に基づく12ステップ方式による自助グループの活動を外部展開し、その有効性を検証し、普及を目指すと共にその学問的裏付けを強化する。また、不登校・ひきこもり等の最近の学生等に起こっている学生の依存症に関しても、研究を進めたい。

調査研究フレームワークの確立と実践・基本的調査研究の実施・定例研究会の開催・12ステップ方式自助グループの実践と理論家・学生依存問題研究会の形成準備をして行く。定例研究会を6月、9月、11月、1月、3月の年5回とシンポジウム(全国交流集会)をGLG12ステップGと共催して7月か10月に開催予定

### 「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ

所員 グループリーダー 富岡 幸一郎

本年度はこれまでの研究会の流れを継続して、近代日本におけるキリスト教受容の問題を中心に勉強会や講演会などを企画する。明治文学とキリスト教受容、プロテスタント、カトリックと近現代文学などの課題を研究する。また、日本の宗教(仏教、神道、儒教の系列)とキリスト教徒の比較宗教の視点も加えてみる。とりわけ浄土教(親鸞など)とキリスト教(一神教)との宗教比較を試みてみたい。できれば外部より専門家を呼んで講演、シンポジウムも企画したい。

### 「いのちを考える」研究グループ

所員 グループリーダー 松田 和憲

関東学院内(幼稚園から大学生)を対象に、『いのち』に関する意識実態調査を行う。今までは点として『いのち』を捉えていたが、今年度から線として考え意識調査を行い分析して、まとめたことを今年

度課題にする。

## 「奉仕・ボランティア教育」研究グループ

所員 グループリーダー 所澤 保孝

本研究グループは①奉仕・ボランティアの調査研究としてすでにキリスト教主義学校の生徒、大学生、宗教主任等に調査アンケートを実施、結果を発表してきた。今年度は、キリスト教学校で教育を受けた生徒と公立の学校で教育を受けた生徒との奉仕・ボランティア意識に違いがあるかどうかを調査する。②奉仕・ボランティアの思想的分野の研究。③教科書の中で奉仕・ボランティアがどのように扱われているかの分析を試みる。すでに日本の小学校、中学校については分析したが、今後、外国のテキストではどのようなになっているか研究調査を進める。

## 資料委員会

所員 委員長 村椿 真理

### 1. ブラウン資料調査

前年度資料委員会は、本学図書館がブラウン翻訳書の何を実際に保管し所蔵しているかを再調査すべく活動した。事前準備を行ない、今後も川島先生の協力を得てこれに着手し、更なる調査を行なう。所蔵されているブラウンの手になる古書は決して数は多くないが、徹底した調査の必要がある。

### 2. 貴重古書収集

今年も調査しつつ古書を発掘、入手したい。以下は前年度入手した主なる貴重書である。委員会は目下は通常研究会等の活動は休止、古書調査と恒常的に取り組んでいる。昨年度は点数はわずかではあったが、注目すべき成果をあげることが出来た。委員会の働きはもとより結果だけで評価されるべきものではないが、会の発足来多くの重要文献の発掘に携わった事実を今後提示できるようにもしていきたい。

1. The Papers Christian Union Published by The Voice, Tokyo Japan. 1899.

The Letter and The Spirit of Christian Oneness : By Rev . Albert Arnold Bennett, Yokohama . B 6 版、本文52頁

※関東学院創設者ベンネット博士の未発見の文献。

2. Psalmist: A New Collection of Hymns for the use of The Baptist Churches.

by Baron Stow and S.F.Smith. Boston.Gould, Kendall and Lincoln.1847.656 p

※1850年以前のバプテストの讃美歌集は後の「バ

プテスト讃美歌」スタンダード版を作る形成期にあったものであり、貴重な資料とされる。北部系の讃美歌集。

3. ネーサン・ブラウン改訂版『新約全書』1894 (明治27) 年版 18×12cm 川勝鉄弥改訂 平かな版。1118頁。

※ブラウン召天後、ホワイト、川勝、ベンネットらが遺業を引き継ぐが、ホワイトは1890年にミッションを脱会した。ベンネットはおそらく神学校に従事していたことから、ブラウンの分割聖書を合本にした作業だけを川勝が担ったものだったとされる。1879年が初版であるが改訂が分冊形式で随時継続されていた。また本書出版の裏にはブラウン訳聖書改訂方針にまつわる更なる諸事情があった。希少価値は高く、今ではめったに発見されない書である。

## 広報委員会

所員 委員長 武田 俊哉

広報委員会の役割は、本研究所の活動に関心を寄せて頂いた全ての方に研究所の活動を知って頂けるように、様々なメディアを通して広報活動を行うことである。すなわち、(1)ニュースレター等の刊行物を編集、出版すること、及び(2)ホームページの運営管理を行うことである。

ホームページ運営については、定期管理体制が円滑に機能しており、継続的な情報発信を行っている。更に昨年度は、懸案であった英文ホームページの開設に至り、本研究所の活動を世界へ向けて発信することが可能となった。本年度も引き続き、継続的な更新、運営を進めていく。

ニュースレターについては、昨年度と同様3回の発行を予定している。研究所の活動を広くお伝えできるよう今後益々の内容充実を図っていきたい。皆様のご協力、ご指摘、寄稿を頂きたいをお願いします。

## 所報編集委員会

所員 委員長 安田 八十五

2007年度から所報の体裁の大幅な変更を行った。表紙に大学チャペルの写真を入れ、紙質も変えた。そのため目次は、中に入れ、研究論文9本、研究ノート3本、合計248頁になり、2006年度の191頁を約57頁上回り、読みやすさ、手にとって関心を持てるよう努力し、論文の水準も高く保っている。2008年度は編集委員会を7回予定している

パネリスト：タイ国立チェンマイ大学人文学部日本語学科助教授 ベンジャーン・ジャイサイ  
国立法人弘前大学国際交流センター教授 大西 純  
司 会：(株)永田農業研究所研究員・北京大学中国社会信用研究所客員研究員 吉川 成美

## 第二部

タイ、ラオス、ミャンマー、中国の国旗、人の顔、料理、住居、寺院の違いについてクイズ形式にてパネリストが質問し、参加者が挙手にて回答。

### タイ北部

17県に別れ、米など農産地である。人は優しく、マイペース。肌が白く、やせていて、中背。女性の髪が長い。産業はもち米が主、にんにく、赤ねぎ、大豆、タバコの葉、竜眼、ライチを栽培する。寒いので長袖の服を着る。北部タイ下部では料理は中央部と同じようなものを食べ、主食はもち米ではなく、白米。上部ではもち米を食べ、ナンプリという辛いチリペーストを野菜と一緒に食べる。チェンマイは200年くらいミャンマーに支配されたのでミャンマーの料理などミャンマーの文化が混じっている。手工芸品ではチーク材から作ったものや、銀細工が主。

### タイ東北部

19県に分かれ面積はタイの3分の1ほどあり最大の人口。人はやさしい人が多く、生活はシンプル。産業は稲作の面積が他地域より多いが、雨量が少ないのでシルクの織物、竹から作った食器かごを作っている。北タイに比べると女性の髪が短い。仏教に熱心な地域で、信徒は3ヶ月出家する必要がある。料理はパパイヤサラダのソムタムが有名。料理が余り豊かではないので、発酵食品が重宝されている。エビ、カニ、ヘビ、カエル、ネズミ、虫などを蛋白源とする。住宅は壁や床などに竹を使い、高床式で屋根は草でできている。床下で機織をしたり、子供の遊び場としてもある。

### タイ中部

国内で一番豊かで、貿易などの中心。平野が多い。川が多いので水辺の生活、人と人のつながりが多い。暑いので女性はノースリーブのシャツを着用し扇子を持つことが多い。産業は、農業より漁業、商業の中心。水上マーケットでは様々商品が売られている。古い迷信も数多く残り、水曜日に頭を洗わない。金曜日は幸せな日なので葬式を行わない、稲作の祭りなどが、その例。料理は味がマイルドで作り方が他地域よりも複雑。白い米を食べ、野菜を中心とし、野菜と一緒に魚や肉を食べる食生活を送る。ココナッツミルクを使い甘辛く宮廷料理の影響を受けているのが中部の特徴。住宅は高床式でベランダが広

い。ベランダで機織をしたり、結婚式をしたりする。

### タイ南部

独自の文化を持ち、面積は4番目。両面を海で囲まれているので、農業、漁業ともに盛ん。GDPが最も高い。性格はまっすぐでせっかち、我慢が強く、行動が早い。東部ではゴム、またドリアンの栽培が盛ん。服はパティックのもので、男性は下にズボンをはき、スカート的にパティックの布を巻く。宗教はイスラム教と仏教があり、上部は50：50、下部は70：30くらいでイスラム教が多い。料理はタイでもっとも辛く、ココナッツミルクと砂糖を使わず魚、焼き鳥、炒め物が多い。住宅は一家に2軒の建物があり住むところ、台所・倉庫に別れ縁起のよい方角を向いて作られる。風が強いので高床式の床は他地域と比べ低い。

写真を基に、住居、寺院、祭り、観光地、料理などを説明。

### タイのお菓子について

タイのお菓子は、砂糖、ココナッツミルクを主体に作り卵が入れられたりする。焼いたり蒸したりする。外国から入ってきたものもあり、長崎からもたらされたものもある。宮廷文化は飾りをきれいに作る。

### タイの経済について

現在タイの都市部と中央部の経済格差が問題となっている。タイの国王はsufficientをモットーに贅沢をするのをやめ、タイがひとつになるように求めている。また、麻薬の栽培をやめ、コーヒーを造る、稲作よりも現金収入の高いアルコールができる作物を作ると土地が10年ほど使えなくなるので、稲作で儲かる稲作、輸出して価値のある穀物をつくるよう呼びかけている。タイの持つ自然の豊かさを生かし多くの人が長く暮らしていける方法を模索している。また、億単位の住居が買える人々がいることも事実であり見逃すことができない。

### タイ人学生に聞いた日本(人)へのイメージ

#### 日本語学科を選んだ理由

・日本の漫画が読みたい・日本が好き・日本に行きたい・ゲームの説明書が読みたい

#### 日本人のイメージ

・まじめ・きれい・よくがんばる・遠慮する・時間を守る・かわいい  
・ルールが多い・暴飲暴食など

日本人とタイ人が同じ職場で働くときに何がネックになるか

- ・日本人はまじめ・時間を守るなど(良いイメージ)
- ・その反面融通が利かない・状況判断ができない・怒りっぽい(悪いイメージ)

タイでは初志貫徹という言葉がないが、日本人はそれが当たり前。しかしタイでは臨機応変さが重要なようだ。また、人の前で叱った場合ものすごくうらまれる。タイ人に対しては諭さないといけない。

タイ人の日本に対するイメージは20年前から変わっていない。古いイメージが残っており、日本人の男性はまじめだが奥さんを大事にしないと思われる。だんな様が帰ってくると奥様は玄関で三つ指ついて待っていて出迎える、と思っているようだ。とても近い国ではあるが、情報は少なく、伝わっていない。大使館でのタイからの国費留学生の面接では、学生の9割がなぜ日本に来たいのかとの問いに「日本の漫画に感動した」や「日本のミュージシャンが好きだ」とのことだ。日本の漫画の影響がとても強い。

また、肌の色に関し白さに異常に執着を持っているようだ。色が白いことが美男美女であるようだ。

#### 日本人から見たタイ人のイメージ

- ・微笑のある、優しい、怒らない(良いイメージ)
- ・適当、時間は不正確、約束は守らない(悪いイメージ)

一緒に遊ぶのはとても良くてビジネスは地獄である。タイ人は梓にはまったことをきっちりとするのは苦手なようだ。プレゼントを渡した場合日本人のようにすぐにお返しをしたり、謝辞を言うことはない。タイ人にとってプレゼントはくれた人が徳を積んだと思い、くれた人が徳を積んだことにより、幸せになる。また再度会ったときに謝辞を述べることは「非常に良いものだった、また欲しい」との意が含まれる。しかし、お礼もお返しもしない訳ではなく、「この人はいい人だから、先々何かしてあげよう」と考えるようだ。物事に対して長期的な見方である。中国でも同じところがある。

#### ベンジャン先生の日本のイメージ(20年前と比較して)

- ・グループ行動が多いと思っていたが、個人的な行動も多い
- ・女性の強さが良く見られるようになった
- ・若者が非常に自由になった
- ・親子と一緒に風呂に入るのが面白い
- ・子供が親に対して口答えをする
- ・モダンでメトロポリタンであるが、豊などが残っているのは非常に良い
- ・狭い空間で生活したり、働いても問題が起こらない

- ・日本人は非常に優しい、女性が頭を下げ挨拶するのは素晴らしい
- ・信用ができる、きちんとした、完璧主義

#### 質疑応答

Q タイに行ったときに気をつけなければいけないことは?

A 怒りの感情を出さない、ニコニコしながら叱る、喜びの感情を出す。自分が傷つかないように気をつける。また、タイ人はニコニコして自分の怒りの感情をなかなか表さないが、爆発したときは大変である。全体の犯罪数、犯罪率は少ないが、殺人事件は多い、日本の8倍である。子供のころから心を冷静に保つよう教育されている。

Q 学生時代にタイに行った時、印象に残る、見るべき場所は?

A タイの大学に行き、学生と話すこと。  
チェンマイの売春の中心街を観て、なぜ生活のために体を売らなければいけないのかを考える。  
お寺に行き、半日くらい座禅をし、どんな人が来るのか見てみる。

Q 先般、日本対タイのサッカーの試合があったが、結果は負けてしまったタイのチームのほうが親しみがわくののだが?

A タイはとてもサッカーが盛ん、熱くなる。それはバクチで、お金をかけているから熱くなるようだ。タイ人はバクチ好きで、タイボクシングも違法だがその対象である。

世襲の世界で、相続税、贈与税もないに等しい。富豪は富豪のまま、貧乏は貧乏のまま。そのためバクチがはやるようだ。タイは社会を変える必要があまりないと考え、また戦争をやって負けたことや、占領されたことがない、昔からあるものを変えていない。平等社会ではない。名前の末尾に～アユタヤ、～スコタイとついている人は、王族の流れだから自然と誰も逆らわない。階級社会の影響が色濃く残っている。

Q 現地での技術移転について?

A 日系企業は大卒で新人教育からはじめるが、欧米企業は即戦力を求める。日系企業は試用期間を設け、その間賃金も安くしているが、実際に技術が身についたころには他の企業に逃げられてしまう。また、日系企業でタイ人が辞めない、長く働く企業は「タイ文化を理解し、タイ人は賃金がすごく安い環境を作れる」、「フレキシブルな人事システムにより、タイ人にも昇格のチャンスがある」、日本から重役が来てタイ人は明らかに労働者で、厳格な環境の会社は大量に採用し、どんどん辞めていく繰り返しが続く。しかし、日系企業で働くステイタスがあるので応募に大勢が来るから問題ないと考える企業も多いようだ。

## 2008年度所員・研究員・客員研究員紹介

### ◇所長

松田 和憲 (大学宗教主任・工学部教授)  
「いのちを考える」研究グループ

### ◇所員

森島 牧人 (学院長・文学部教授)  
「国際理解とボランティア」研究プロジェクト  
帆苺 猛 (学院宗教主任・人間環境学部教授)  
「坂田祐」研究プロジェクト  
所澤 保孝 (人間環境学部教授)  
「奉仕・ボランティア教育」研究グループ  
影山 礼子 (法学部教授)  
「奉仕・ボランティア教育」研究グループ  
村椿 真理 (法学部教授)  
「バプテスト」研究プロジェクト/資料委員会  
安田八十五 (経済学部教授)  
「依存症とキリスト教」研究プロジェクト/所報編集委員会  
富岡幸一郎 (文学部教授)  
「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ  
細谷 早里 (経済学部准教授)  
「奉仕・ボランティア教育」研究グループ  
箕 弘幸 (工学部教授)  
広報委員会 ホームページ担当  
武田 俊哉 (工学部准教授)  
広報委員会/「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ  
牧野ひろ子 (人間環境学部准教授)  
「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ  
本村 浩二 (文学部准教授)  
「バプテスト」研究プロジェクト  
渡邊 光一 (経済学部教授)

### ◇研究員

精木 紀男 (工学部特約教授)  
「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ  
「依存症とキリスト教」研究プロジェクト  
矢嶋 道文 (文学部教授)  
「坂田祐」研究プロジェクト  
小林 照夫 (文学部特約教授)  
「国際理解とボランティア」研究プロジェクト  
Dwight P. Davidson (文学部特約講師)  
「いのちを考える」研究グループ  
「国際理解とボランティア」研究プロジェクト  
大豆生田啓友 (人間環境学部准教授)  
「いのちを考える」研究グループ  
佐藤 光重 (法学部教授)  
「バプテスト」研究プロジェクト

### ◇客員研究員

川島 二郎 (日本バプテスト横浜教会員)  
「バプテスト」研究プロジェクト/「資料委員会」  
三浦 一郎 (工学部・経済学部非常勤講師)  
「いのちを考える」研究グループ  
山本 直美 (同志社大学非常勤講師)  
「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ  
「国際理解とボランティア」研究プロジェクト  
藤原 久仁子 (大阪大学大学院人間科学研究科グローバルCOE 特認研究員)  
「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ  
三井 純人 (カウンセラー)  
「依存症とキリスト教」研究プロジェクト  
「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ  
田代 泰成 (横浜女学院中・高等学校教諭)  
「依存症とキリスト教」研究プロジェクト  
「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ  
菊地 昌弥 (東京農業大学国際食料情報学部准教授)  
「国際理解とボランティア」研究プロジェクト  
花島 光男 (基督教教育同盟)  
「坂田祐」研究プロジェクト  
安達 昇 (公立小学校教諭)  
「いのちを考える」研究グループ

松岡 正樹 (日本バプテスト神学校教務主任)  
「バプテスト」研究プロジェクト/「資料委員会」  
吹抜 悠子 (キリスト教メンタル・ケア・センター相談員)  
「いのちを考える」研究グループ  
長井 英子 (経済学部非常勤講師)  
「いのちを考える」研究グループ  
原 真由美 (Luther Rice University 牧会学博士)  
「バプテスト」研究プロジェクト  
伊藤 哲 (文学部非常勤講師)  
「バプテスト」研究プロジェクト  
「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ  
勘田 義治 (本学文学部非常勤講師)  
「国際理解とボランティア」研究プロジェクト  
島田 正敏 (関東学院六浦小学校長)  
「国際理解とボランティア」研究プロジェクト  
大島 良雄 (元文学部教授・元大学宗教主任)  
「バプテスト」研究プロジェクト  
坂田 創 (元関東学院中・高等学校教諭)  
「坂田祐」研究プロジェクト  
枝光 泉 (日本バプテスト連盟 北山バプテスト教会牧師)  
「バプテスト」研究プロジェクト  
田中 喜芳 (ニューポート国際大学大学院客員教師)  
「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ  
佐々木 敏郎 (本学法学部元教授)  
「バプテスト」研究プロジェクト/「資料委員会」  
古谷 圭一 (恵泉女学園大学名誉教授)  
「バプテスト」研究プロジェクト  
石谷 美智子 (元経済学部非常勤講師)  
「いのちを考える」研究グループ  
「依存症とキリスト教」研究プロジェクト  
吉川 成美 (永田農業研究所研究員)  
「国際理解とボランティア」研究プロジェクト  
佐々木 晃 (元関東学院中・高等学校教諭)  
「坂田祐」研究プロジェクト  
佐々木 和之 (ルワンダリーチ NGO 現地職員・日本バプテスト連盟国際ミッションボランティア)  
「国際理解とボランティア」研究プロジェクト  
中島 昭子 (捜真学院中・高等学校教頭)  
資料委員会  
小高 千恵 (関東学院野庭幼稚園教諭)  
「いのちを考える」研究グループ  
大西 純 (弘前大学国際交流センター副所長・教授)  
「国際理解とボランティア」研究プロジェクト  
金丸 英子 (西南女学院大学准教授)  
「バプテスト」研究プロジェクト  
加藤 壽宏 (中央学院大学商学部非常勤講師)  
「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ  
「国際理解とボランティア」研究プロジェクト  
森島 豊 (長崎平和記念教会牧師)  
「国際理解とボランティア」研究プロジェクト  
安井 聖 (文学部非常勤講師・日本ホーリネス教団西落合教会牧師)  
「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ  
小林 弥生 (カウンセラー・経済学部・人権環境学部非常勤講師)  
「依存症とキリスト教」研究プロジェクト  
高野 進 (本学名誉教授)  
「奉仕・ボランティア教育」研究グループ  
神谷 光信 (神奈川県立横浜旭陵高等学校教諭)  
「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ  
斎藤 剛毅 (福岡女学院大学名誉教授)  
「バプテスト」研究プロジェクト  
葛西 賢太 (宗教情報センター)  
「依存症とキリスト教」研究プロジェクト  
岡西 愛濃 (フェリス女学院大学 大学院生)  
「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ  
小玉 敏子 (学校法人捜真学院理事長)  
「坂田祐」研究プロジェクト

客員研究員 葛西 賢太

宗教情報センター研究員の葛西賢太と申します。上越教育大学教官として7年ほどつとめた後、現職に至っています。

大学院時代は、近代米国宗教史の研究を進めておりました。人間の心についての科学的分析と、宗教思想とを折り合わせようという思潮が、特に19世紀、20世紀には存在していたわけですが、調査をしながらしばしば出てくるのが、Alcoholics Anonymous（以下 AA。直訳すれば、名前を名乗らないアルコール依存症者たち）という団体でした。名称から秘密結社のような団体を勝手に空想していたのですが、そうではなく、米国で広く認知され尊敬されている断酒自助団体であったのです。

私自身は別に禁酒を旨とするわけではありませんが、縁あってこの団体の研究をすることとなりました。AA は宗教ではありません（これは AA の理念を示した文書に明言されています）が、「自分なりに理解した神」を尊重し、アルコール関連問題の重荷をこの「神」にいったん預けることを提案します。これは、キリスト教の神とされてはいませんが、AA がプロテスタントの宗教運動から自立することで始まっていることもあり、しばしばキリスト教的な神の雰囲気をもっています。また、AA の理念と組織は、のちのさまざまな自助団体のモデルとなっています。ですから、このような団体について研究することも宗教学的な実践といえるでしょう。AA についての紹介は多々ありますが、思想と実践に踏み込んだものはこれまでありませんでした。それで研究を拙著『断酒が作り出す共同性——アルコール依存からの回復を信じる人々』世界思想社、2007年にまとめました。この研究は、私が取り組んできた近代自己意識と宗教思想についての考察の一環に位置づけられます。また、最近のお仕事として、島蘭進他との共編『宗教学キーワード』有斐閣、2006年を紹介いたします。よろしく願い申し上げます。

客員研究員 岡西 愛濃

2008年5月に「キリスト教と文化研究所」の客員研究員にいただいた岡西愛濃と申します。「キリスト教と精神風土」研究グループに参加させていただくことになりました。現在、フェリス女学院大学大学院博士後期課程で、『女学雑誌』で活躍した女性作家たちを中心に研究しており、黎明期の女性文学をテーマとした博士論文を執筆中です。

若松賤子や清水紫琴ら『女学雑誌』で活躍した女性作家たちは、『女学雑誌』という場によって生み出された女性作家であるといえます。『女学雑誌』は、女性の地位を向上させることを目指し、旧来の女性に対する道徳をそのまま受け容れるのではなく、文明開化の時代にあるべき「女」について「学」ぶことを目的として明治十八年七月に創刊しており、創刊間もない時期から儒教に代わる女性のための道徳としてキリスト教を取り入れることを勧めています。また、多くのキリスト者たちが『女学雑誌』において、女性とキリスト教に関する啓蒙的な言説を発表しています。「女」を「学」ぶとともに、明治女学校という教育現場をもっていた『女学雑誌』は、女子教育の現場からあらゆる読者に向けて「女」の「学」びの可能性をタイムリーに伝えていきます。『女学雑誌』に展開された女子教育が、キリスト教をどのように受容し、どのような言説を生み出していったのかを明らかにしたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

関東学院大学 キリスト教と文化研究所

〒236-8501

神奈川県横浜市金沢区六浦東一丁目50番1号

TEL: 045-786-7873(研究所直通)

発行者: 松田 和憲

Director: Kazunori Matsuda